



太田裕子著

日本語教師の「意味世界」
オーストラリアの子どもに教える
教師たちのライフストーリー

ココ出版、2010年発行、400p.
ISBN : 978-4-904595-08-4

川上 さくら

1. はじめに

本書は、著者の太田裕子が2009年3月に早稲田大学より博士号（日本語教育学）を授与された博士論文「日本語教師の意味世界と実践の関係性に関する研究-オーストラリア初等中等教育機関の教師が語るライフストーリー分析をもとに-」をもとに刊行されたものである。

タイトルが示すように、本書はオーストラリアで教える3人のオーストラリア人日本語教師に対してライフストーリー・インタビューを行い、教師の「意味世界」を描き出そうとするものである。本書の柱となる問いは二つ、「海外の初等中等教育機関で教える日本語教師は、子どもに日本語を教えることに関してどのような意味世界を持っているのか」、そして「日本語教師の意味世界はどのように形成され、変容するのか」。この二つの問いを柱として、分厚く丁寧な記述によって海外日本語教師の「意味世界」を描いた良書といえよう。

本書で著者は、教室場面で起きているミクロの視点だけでなく、言語教育政策というマクロの視点をも視野に入れてオーストラリアという国の日本語教師たちがどのように考え教育実践を行っているのか、また教師たちがどのように変容して成長していくのかをダイナミックに視点を動かしながら論を進める。他のどこでもない「オーストラリア」という国の日本語教育を、言語教育政策の変遷、日本語教育を支えた理念や教育方法の変遷、そしてこの国で生きる日本語教師の個人史を通して、血の通った形で立体的に描きだしているといえる。

2. 本書の構成とライフストーリーに注目することで見えた「意味世界」

本書の構成は以下の通りである。本書は大きく4つの部分に分けられる。

まず、第1章、第2章では研究の問い、その問いに至った経緯、そして研究方法が述べ

られる。本書のタイトルで存在感を放つ「意味世界」という言葉。そもそも「意味世界」とは何か。太田は日本語教師が「日本語と日本文化をどう捉えるか、子どもをどう捉えるか。実践の文脈をどう捉え、それに対してどのような行動を選択するか。子どもにとっての日本語の学びや、日本語教育をどう意味づけるか」などの「日本語教育の意味と実践に関して日本語教師が持っている意味づけの総体」と定義している (p.1)。

では、なぜ「意味世界」に注目するのか。太田は日本語教師個人の考えに注目した研究が非常に少ないことを指摘している。ピループ研究という、教師の考えに注目する領域はあるものの、ピループ研究の多くはある教師集団に対して質問紙調査を行うなど、量的研究法が採られることが多い。しかし、量的研究では研究者の問題関心がある側面だけに注目があてられ、加えて、教師が個人というよりも所属するグループによってくられて捉えられてしまうと指摘している。一方、質的研究では、教師個人の考えに注目する研究が見られるものの、教師自身の世界を捉えようとはせず、ある政策や教育理論に対してその教師がどのように考えているかを描き出そうとするものが多く、教師をトップダウンの政策や理論を受け取る「受け手」としてしか見ていないことを指摘している。以上の指摘をしたうえで太田は、日本語教師を対象とした研究では、「個々の日本語教師自身が構成する意味世界を、包括的に捉える視点」(p.17) が欠如していたと述べる。このような、教師を「包括的に」捉える視点は、今までの研究ではなかなか語られることのなかった新鮮な切り口といえよう。

本書の最大の特徴は「教師」に焦点を当てる点である。教師に注目する研究は、多くの場合「教室」という場で何が起きているか、つまり、教師はいかに学習者へものごとを教授しようとするのかを解明しようとするような研究であることが多い。しかし、本書はミクロの教室場面だけに注目するのではない。著者の太田はオーストラリアの大学院に留学し、現地の日本語教育現場を直接観察することで日本語教師たちと深い信頼関係を得ることができた。この真摯な姿勢で築き上げた著者と日本語教師たちとの関係性があったからこそ、太田は「教師」と寄り添い、一人一人の教師の個人史を聞き出すという方法を採用することができた。ライフストーリー分析という手法を採ったことで、この複雑でダイナミックな日本語教師たちの意味世界が描き出されたのである。

次に第3章では、オーストラリアの日本語教育がどのような言語教育政策や言語教育理論の変遷をたどってきたのかが丁寧に記述されている。オーストラリアの日本語教育の状況を歴史的な視点から捉えている部分といえよう。この部分はその後の3人の日本語教師たちの語りを理解する際に大変重要な背景を与えてくれる視点であり、本書の第7章における考察部分で日本語教師個人が言語教育政策におけるアクターとして行動する姿を如実に見せつける上で重要な記述となっている。

オーストラリアの日本語教育がどのような意義付けをされて行われてきたのか、詳細を記述することは本書に譲るが、重要なキーワードに「多文化主義」、「言語マイノリティーのための LOTE (Languages Other than English) 教育」、「言語に関する国家政策」、「全てのオーストラリア人のための LOTE 教育」、「オーストラリアの学校におけるアジア言語・文化教育に関する国家計画 (NALSAS 計画)」、「異文化間能力の育成 (Intercultural Language Teaching: ILT)」などがある。これらのキーワードはどれもオーストラリアの

日本語教育の流れを左右してきた重要な政策や考え方であり、オーストラリアの日本語教育に関わるならば知っておきたい内容である。本章ではひとつひとつの政策や理論がどのような社会的意義をオーストラリアの日本語教育に与えたのかが丁寧に記述しており、大変理解しやすい。オーストラリアの日本語教育に関わることもあるならば、この部分はぜひ一読していただきたい。

続く第4章、第5章、第6章の3章に渡り、3人の日本語教師たちの語りが記述されている。取り上げられる3人の教師は三者三様の経歴を持つ。第4章で描かれる Margaret は50代のイギリス系オーストラリア人。「日本語教師としてだけでなく、カリキュラム執筆や地区の LOTE コーディネーターの職も務めた」経験豊かな教師である。第5章では Anne という教師で英語を第二言語とする40代のオーストラリア人の語りが紹介される。彼女は「高校時にオーストラリアへ移民し」てきたのだという。前章の Margaret が高校で教えているのに対して、Anne は二つの小学校を掛け持ちして教え、その後、大学院で日本語教育についてさらに学び始める。第6章の Kate は3人の中で最も若い30代の教師で、スコットランド出身。日本に住んだ経験もあるが、「日本語教師を辞め、学級担任教師に転向」という選択をし、彼女はその経緯を語りながら彼女の意味世界を紡ぎ出している。彼女たちの語りを通して私たちは、教師がいかにか自分たちの「意味世界」に基づく行動選択をしているかを理解する。

そして最後の第7章、第8章が考察部分である。第7章では「海外の初等中等教育機関で教える日本語教師の意味世界とその形成・変容過程」という題のもと日本語教師の意味世界を構成する要素と日本語教師の意味世界がどのように変容していくのか、3人の日本語教師たちの語りに基づいて考察が加えられる。そして、著者はこの第7章で「日本語教師にとって、子どもに日本語を教えることは、日本語教師の意味世界全体を伝える営みである」(p.313)と述べる。これはまさしく、日本語教師が主体性を持った個人であることを示し、太田は教師が持つ意味世界が彼らの実践を形づくる礎であることを主張するのである。

日本語教師の意味世界を構成する要素に関する考察の中で、ライフストーリー・インタビューという手法を採ったからこそ現れた要素がある。それは3人の日本語教師が共通して「日本語、日本、日本人」に対する「肯定的な感情」を抱いていたという要素である。著者はその感情が彼らの日本語教師としての「意味世界」を構成する重要な要素となっていたと考察する。太田は、日本語教師たちが個人的な経験から形成した「感情や人生における意味づけが、日本語教師の意味世界の構成要素であるという点は、重要である」(p.294)と述べる。つまり、個人的な「人と人との結びつき」が、日本語教師が日本語を教える動機づけになっているということである。

太田はさらに第8章で、この「人と人との結びつき」は学習者が日本語を学ぶ理由ともなることを指摘する。オーストラリアの日本語教育が「経済的意義」によって支えられた過去があるが、「海外の初等中等教育機関における日本語教育の意義として、人と人との結びつきを、経済的、政治的、職業的意義以上に、重視していくことが重要である」(p.360)という示唆がされている。

海外の日本語教師、日本語学習者への支援として私たちができることには、新たな教授

法を伝えることや教材開発以上にこの「人と人との結びつき」をサポートすることが重要なのだと実感させられる。これはオーストラリアの日本語教育を直に目にする評者の経験からも、実感を持って納得ができる点である。海外にいる日本語教育支援者は、その支援者自身が「日本語、日本、日本人」と直接つながる人間として、現地の日本語教師や日本語学習者と「人と人との結びつき」を築いていくことこそ、意味のある日本語教育支援になるといえるだろう。

では、ミクロの個人的な経験だけが日本語教師の意味世界を作り上げたのだろうか。本書で太田はマクロの視点から、いわゆる政策や理論が教師たちに確実に伝わり、彼らの「意味世界」を作り上げる要素となっていたことを描き出す。「言語教育政策、言語教育理論、日本語教育の状況を含む、オーストラリアの社会的、文化的、政治的、経済的文脈は、直接的、間接的に、日本語教師の経験を作り出していた」(p.339)という指摘があるように、マクロレベルで示される政策や考え方は、様々な形で3人の教師たちに影響を及ぼしていたという。3人の日本語教師たちの語りを分析することで、教師という「個人」がいかに関言語教育政策と向き合い、主体的なアクターとして行動しているかがリアルに伝わってくる。

3. 教師の学びとは

では、日本語教師たちの「意味世界」はどのように変容、そして成長していくのだろうか。

この点について太田は、3人の教師たちのライフストーリーから、たとえ同じ経験をして同じような「意味世界」の形成が起こるわけではないと述べる。なぜなら、「日本語教師の学びは、経験そのものによって起こるのではなく、個々の経験を意味づける行為を通して起こる」からである。「日本語教師の学び」を実現するには「知識や経験を一方的に与え」るだけでは不十分で、「過去の経験を現在の状況との関わりの中で意味づける継続的な過程」があってこそ実現できるのだと指摘する。(pp.341-342)

教師の「意味世界」が実践を支えているからこそ、教師の学びを促すためには教師の「意味世界」を変容させるアプローチが必要だという指摘は、教師研修や教師支援をするものにとって重要な視点といえるだろう。知識や方法を提供することだけでは教師の成長にはつながらない。ひとりひとりの教師はみな、個性のある「意味世界」を持って実践を行っている。教師ひとりひとりがそれぞれの実践を省察し「意味世界」を再構成できる時間とネットワークを保障してこそ教師の成長が可能となる。教師の成長とは何か、その実態を的確に捉える必要があることを太田は提起しているのである。

4. 本書の意義

本書は一方でオーストラリアという国の言語教育政策やそこで重視されてきた言語教育理論の変遷を整理して提示し、もう一方でその時代を生きる3人の教師の生の「声」に耳を傾け、主体的に思考し、主体的に実践を行う教師の姿を描き出した。著者の太田は、本

書の最後で、日本語教師は「研究者が考えるよりも、はるかに豊かで幅広く、複雑な意味世界を持っている」と述べる (p.374)。しかし、世界的に教育のスタンダードが叫ばれ、画一的な試験や基準で教育の到達度が測られる時代を迎えている今、教師個人の「意味世界」は政策や理論に凌駕されて軽視されかねない。本書はそのような時代の流れに切り込み、教師個人の「意味世界」に注目し、教師の主体性に価値を見出し、彼らの「声」を聞こうとしたのである。

5. おわりに

本書はライフストーリー研究である。ライフストーリー (語り) とは時と場合によって、また、聞き手との関係性において様々に形を変え、語られるストーリーも変わってくる。本書で語られた3人の教師の語りはより多く時間をかければ、また異なる様相を見せるだろうし、それぞれの人生がさらに進む中で変化することは大いに考えられる。今後もさらなるライフストーリー研究が積み重ねられ、多くの豊かなライフストーリーと出会うことに期待する。

現在オーストラリアの初等中等教育機関では、全国共通の教育スタンダードである *Australian Curriculum* についての議論で持ちきりである。今までは各州に任されていた教育が全豪統一のカリキュラムの登場で今後どのように変わっていくのか、注目したい。*Australian Curriculum* では教科横断的重点の一つとしてアジアとオーストラリアの関係について学ぶ、いわゆる *Asia Literacy* が位置付けられている。この動きも、一人一人の日本語教師たちの「意味世界」に何らかの影響を持つことになるだろう。

海外で初等中等教育段階の子どもたちに日本語を教えるというのはどういうことか。将来日本に行くとは限らない子どもたち、さらに日本語とは別の言語を学ぶという選択肢もある子どもたちに、どのような理念を持って日本語を教えたらよいのか。現在、私は国際交流基金の派遣で日本語指導助手としてオーストラリアのパーズで現地日本語教師たちとともに実践を行っている。このような立場で私が日々、現地日本語教師や日本語を学ぶ子どもたちと関わることにどのような意味があるのか、本書は丁寧に示してくれているように感じる。オーストラリアに限らず、日本語教育が展開されている他の地域や国においても、いかに海外日本語教育を支援していくことができるか、多くの示唆に富む研究といえるだろう。

関連サイト

Australian Curriculum, Assessment and Reporting Authorities Web Page
<http://www.australiancurriculum.edu.au>

(かわかみ さくら 国際交流基金・指導助手 (パーズ派遣))